

「自然との共生をめざした環境教育のあり方」

－身近な環境や自然に対し、主体的に関わることのできる子どもの育成－

I. 主題設定の理由

今日、環境問題に対して多くの人々の高い関心が寄せられている。特に都市化、生活様式の変化に伴うゴミの増加や水質汚濁、大気汚染など都市・生活型公害問題や、地球の温暖化、オゾン層の破壊、熱帯林の減少など、地球的な規模で課題になっている環境問題が、今、世界的に大きな課題となっている。

環境教育は、こうした地域環境の変化や地球規模の環境破壊の進行に伴って、環境の保全と資源の有効活用が社会的に要請されるなかにあって、今、学校教育だけでなく、家庭や地域社会における教育に大きな課題となっている。環境教育を単に環境や環境問題についての知識を得るための場ととらえるのではなく、子ども一人一人の生きる力を育む場として位置づけ、子どもの生活に根ざしたものとしていくことが大切である。

そこで、小学校における環境教育では、子どもが身近な環境に意欲的に関わり、問題を見だし、考え判断し、よりよい環境づくりや環境の保全に配慮した望ましい行動がとれる態度を育てることを目指すことが大切であると考え、本テーマを設定した。

II. 研究の内容と方法

1 研究の具体的内容と方法

- (1) 環境教育についての理論研究をする。
- (2) 学校教育における環境教育への取り組みについて研究と実践を進める。
 - ・各校の環境教育年間指導計画の研究
- (3) 一人一実践をし、情報交換をしながら研究を深める。

ア. 研究授業

9月 「生き物見つけ 大きくせん『むしさん こんにちは!』」

【生活科】(井尻小1年) 授業者: 森澤あけみ

◎環境教育の視点

- ・虫をさがす時にどんなどころにいるか環境を意識させた点。
- ・環境と触れ合うために、草や土の臭い、風や雨の音など五感を使って自然の中で虫と遊べるようにした点。
- ・虫にも命があることに気付き、優しい気持ちで接してほしいので、「むしさん」と呼び捨てにさせなかった点。

1月 「ごみのゆくえ」【学級活動】(岩手小1年) 授業者: 廣瀬 康子

◎環境教育の視点

- ・自分たちの住んでいる家庭・学校・地域でごみの多い実態を調べ、環境について意識化をはかった点。
- ・ごみを少なくしきれいな生活環境にするために、自分たちでできることはないか、1年生なりに考えさせた点。

イ. その他の実践

一人一実践の報告

(4) 臨地研修を実施し、教師の見聞を広めかつ力量を高める。

8月: 乙女高原での自然散策(講師: 植原彰先生)

Ⅲ. 成果と課題

1. 今年度の成果

- ・子どもが身近な環境に意欲的に関わり、問題を見だし、考え判断し、よりよい環境作りや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる態度を育てることを目指すこのテーマの設定はよかった。
- ・一人ずつの実践を報告し合うことで、それぞれの学校の実態や指導者の思いを聞くことができ大変参考になった。その中で、身近な環境や自然に対し、主体的に関わることでできる子どもの育成について学習し合うことができた。
- ・乙女高原での臨地研修は、講師の先生より丁寧な説明を受けながら実際に目で確かめたり手で触れたりできてとてもよかった。たくさんの不思議に出合い、肌で感じることでとてもいい経験だった。
- ・低学年における環境教育では、身近な自然に目を向けさせ、自然を大切にする心を育てたり、豊かな感性を養ったりすることが大切である。子どもが身近な環境に意欲的に関われるような機会を授業を通して仕組みでやることで、子ども自身も興味をもち、草花や虫たちそれを取り巻く環境に対して優しい気持ちが育っていくことが明らかになった。

2. 来年度への課題

- ・各校の教育課程や全体構想を検討し、学年の発達段階に応じてどのような環境教育ができるのか話し合い、考えていく必要がある。そのためには国内外の環境に関する実態を把握しながら、授業で使える物、多くの教師の参考になるような資料作りを進めていきたい。
- ・各校の環境教育年間指導計画作りを進めたい。

(部長 本宮 聡)